

2005年度卒業研究

ファッション文化と既製服の発展

藤女子大学文学部
文化総合学科 0215071番
氏名 福士 佳純
担当教員 野手 修

序章

ファッションは、我々の日常生活にあふれているだけではなく、この社会に深く浸透している。そして、人間は、何かしらファッションと関わっている。アンホランダ(1980:347)は、たとえファッションに興味がなく、買い物に時間を割くこともなく、衣装もそれほど持たず、資金も時間もなかろうと、自分がどう見られているかはとても気になる、と述べている。

では、そもそもファッションとは何なのか。この問題については、様々な議論がなされてきたが、1人1人が独自の考えを持っており、答えを1つにすることはできず、まだ結論には至っていない。さらに、衣服はそれをまとう身体なしでは成り立たないのである。では、身体と衣服にはどういった関係があるのだろうか。

本論では、ファッションの持つ意味を考えると共に、衣服と身体との関係性を考察する。さらに、我々が普段着ている既製服について述べ、日本における洋服の発展や洋装下着の登場によって何が起こり、人々にどんな影響を与え、それによって人々の身体観や美意識などがどう変化していったのかを検討してみる。

第1章では、まずファッションとは何なのかについて考察する。歴史的には、ファッションは西洋において社会的地位をめぐる闘争のための道具として発展したが、これは現在、流行に見られるように、人間が言葉以外で行うコミュニケーションのひとつとして考えることができる。例えば、初対面の人がどんな人なのかを理解するのに、衣服は非常に大きな手がかりになる。以上をふまえ、コミュニケーションとは何なのか、多角的な視点から検討する。

第2章では、現在、日本人の服装として定着している洋服が、既製服として登場するまでの歴史を述べ、それが発展した背景にはどんなことがあったのかを述べていく。戦前までは和服が着られていたが、戦後アメリカの占領下に置かれたことによって、洋装化がすすんでいった。しかし、当時、洋服は売っていなかったため、自分で作るしかなく、洋裁ブームが起こり、ミシンも生産された。また、洋服が普及するに伴い、洋服に合った下着として登場した、洋装下着の歴史についても触れていく。和装下着は、激しい活動には不向きであり、冷えるという欠点があった。しかし、洋装下着は、活動的で保護・保温機能に優れているという長所があったので、特に女性の間で流行していった。さらに2度あったとされる下着革命についても述べていく。

第3章では、我々が持つ身体観について考察し、衣服と身体の関係性を検討していく。日常生活における衣服や装飾品は、身体を社会化し、身体に意味やアイデンティティを付与する手段のひとつである。自己経験と自己表現における本質的な部分を構成し、アイデンティティの問題と強く結びついているのだ。つまり、衣服・身体・自己、この3つは同時に全体として知覚されるものなのである。次に、洋装下着の登場により、日本人の身体観は変化した。特に女性の身体観がどう変化していったかを考察していく。パンティ・ストッキングやブラジャーなど、我々の身近にあるものの出現を例にとり、述べていく。最後に、日本人の立居振舞いの変化に注目してみた。洋服の普及に伴って、身体が変化したのと同様に、立居振舞いも変化していった。今回は、歩き方と姿勢の変化について考察してみた。歩き方や姿勢は、生活様式と深く関係しているので、流しなどの生活様式の変化についても述べた。

以上のような考察から、我々にとって欠かすことのできないファッションの持つ意味と人々に与える影響力を理解することで、我々が衣服を着る意味が見えてくるのではないだろうか。また、ものが登場し、発展することには、歴史的背景が大きく関わっており、それを考察することで、当時の人々の身体観や美意識を知ることができるのである。ファッションは我々と過去との相違点を検討することを可能にし、我々が将来に対し投げかける問いを、より鮮明なものにする上での1つの重要な手助けになるだろう。

このように、様々なことに対して疑問を持ち、考察することは、視野が広がり、自分の置かれている環境や自分自身を見つめ直す良いきっかけとなるだろう。

第1章 ファッションと衣服の理論

1. ファッションの定義

ファッションの役割は、思想や行動、そして衣服という物質を通して、個性的になり群集の中で目立つことでもあるといわれる。ファッションは絶えず変化し、新しい世界を開き、新しいものを我々に見せる。しかし、それが逆になることもありえる。つまり、ファッションによって現状が維持され、社会秩序への服従と画一化が押し付けられることもある。ファッションを流行の意味とすると、それは衣服やイメージの消費だけに限られるものではない。日用品や食べ物など我々の身の周りにある消費文化はもちろん、芸術や科学など様々なジャンルであっても、よく観察すれば、一過性の様式に支配されており、ファッションと無関係な分野を探す方が難しいくらいなのである。(成実2003:211, 212)また、流行の際立った性質は、ほんの一瞬前までは例外や気まぐれだったものを無理強いし、それを急に新しいルールや規範として受け入れたかと思うと、それが当たり前になり、みんなの「もの」になってしまった後はまたうち捨ててしまうことである。(ポッジョーリ1968:79)さらに、流行には思想や商品や美意識をとりあえず1つのレッテルにまとめる働きがある。ある時急に、これこそ最先端、ここが流行の発信源、これこそ重要だと、みんながいきなり気づき、納得してしまうのだ。そんな一瞬のひらめきこそが、ファッションの魅力なのである。ファッションを通して人間の創造性に直接触れられると考えられているのも、そこにすぐれた感性が介在していると考えられているからであろう。しかし、あまりにたくみに隠蔽されているので、ある意味でショッキングな正反対の性質もある。ポッジョーリも述べたように、流行とは実は永遠に同じであることであり、現状を維持する働きがあるのである。それは、事態はむしろ逆なのに、変化が起こっているかのように信じさせる大げさな身振り、詐術、手先の早業である。流行がいきなりひっくりかえってしまう、というポッジョーリの警告が示しているのはこのことだろう。流行とは本当に新しいものが広がっていくことではない。なぜなら、真に新しいものは日常の生活構造にそんなに急には溶け込まないからである。ファッションは、行動、産業、社会的抑圧といった様々な形を借りて登場するが、新しいものを徹底して経験する機会にはならない。それは絶えずリサイクルされ、新たなマーケティング戦略を導入することで、維持されていく。(フィンケルシュタイン1998:13, 14)また、ファッションに関心を持つ人々の動機は実に多様であることは認めざるを得ない。クエンティン・ベル(1976)は、

ファッション論の冒頭で、流行を追う人は無思慮か騙されやすいか、あるいはその両方だという命題を掲げている。なぜならお洒落であり続けるためには、とらえどころのない目的のためにあまりに多くの時間と賃金を費やすという、およそ無分別な振舞いをするようになるからだ。いわゆる無意味な浪費をしたいなら、他の何よりも高価なドレスを買うことだ。快適で満たされた生活を送りながら、これほどおそろしいまでの欠乏感を体験することもないだろう。(ヴェブレン)しかし、ベルの見解は合理的ではあっても見当外れであり、ファッションはその人が愚かで騙されやすい人間かどうかの目安となるという立場を代表するものだ。しかし、流行のドレスを着るためにすすんで身体の健康を犠牲にする人もいたのである。

ジンメル(1971)やヴェブレン(1953)によって、繰り返しなされている主張は、ブルジョワ階級が出現し資本主義社会へ移行する過程で、ファッションは社会的地位をめぐる闘争のための道具として発展したというものである。彼らが主張するのは、ファッションとは新興資本家階級が貴族的権力や地位に挑戦するために用いた手段の1つである、ということだ。振興資本家階級は、貴族的権力に挑戦するために、まず、王や貴族が彼らに課した奢侈禁止法をあからさまに無視し、地位と差別化を維持するためにファッションに適応し、時代遅れにならないように懸命に努めた。(ジンメル1971, ヴェブレン1953)つまり、これらの著者たちは、「競争」がファッションの起動力となっているという考え方に立っているのである。例えば、ベル(1976)やブローデル(1981)は、ファッションは社会階層の対流移動の機会がほとんど与えられていなかった封建時代のヨーロッパには見られないものであり、また資本主義的消費経済が世界的規模で拡大しても、社会の階層性が厳格であるような文化においては見出されないものであるとする。すなわち、ファッションとは特定の社会環境において見出される特殊な衣服のシステムであるとされるのである。ツェーロン(1992)は、ファッションの歴史は、古典的段階、近代的段階、ポスト近代的段階という3つの主要な段階に区分できると述べている。14世紀から18世紀までのファッションの古典的時代においては、貿易の拡大と都市貴族の勃興によって、封建的社会秩序が脅かされていた。しかし、この時代の衣服は、衣類と社会階層との間の関係が次第に不明確になりつつあった近代・ポスト近代の時代に比べれば、はっきりと庶民と宮廷との間で区別がなされていた。

J・C・フリーゲル(1930)は、その名高い分析の中で、固定的衣服と流行りの衣服とを区別して、西洋近代においては後者が支配的であり、そのことは「近代西洋文明の最

も際立った特徴のひとつとして見なされるべき事実」であると主張した。(フリーゲル1989:73)流行りの衣服とは対照的な固定的衣服とは、「変化のための変化」という理論によってではなく、過去との継続性によって特徴づけられる日本の着物やインドのサリーなどといった伝統的な衣服を指す用語である。

このように多くの理論家たちの間には、規則的で体系的な変化という内的論理に特徴づけられる衣服のシステムとしてファッションを定義することに関して合意が成立している。ウィルソン(1985:3)は、このことを「ファッションとは、急激で持続的なスタイルの変化という重要な特徴を持つ衣服のことであり、ある意味でファッションとは変化のことである」と表現している。同様に、デーヴィス(1992:14)は、スタイルや慣習やおなじみの衣服あるいは流行のモードなどから、ファッションを区別しているものは何であるかを探ろうとするファッションについてのいかなる定義も、我々がしばしばこの用語から連想する変化の要素を強調しなければならない、と述べている。

このように、ファッションとは、ヨーロッパの封建的社会や今日でも現存する伝統的な共同体から連想される衣服などとは全く異なって、特定の社会的・歴史的環境の下で生まれ固有の発展を遂げてきたものである。だからファッションという用語を定義する際には、ファッションの影響下にある現実の経済や衣類供給に関わる産業ならびに技術の変遷についても考察する必要がある。ファッションという用語は、建築術や大学での仕事も含めて、社会生活における何らかの種類の体系的変化を指す時にも用いられる一般的な用語であり、衣服に関係のあるファッション・システムという用語は衣類の生産と流通のための特定の組み合わせを指すものである。(エントウイスル2005:66,67)さらに、レオポルド(1992)は、ファッションは複雑なシステムとして考えられるべきであって、それゆえに、ファッションは文化的現象としてだけではなく、マーケティングや小売り、さらには製造や技術の側面をも含むものとして理解されるべきものであると述べている。また、ファッションとは、社会階層の対流移動が可能な社会に見出される衣服のシステムであり、またそれは特定の種類の社会において見出される生産と消費の独特な関係を含み、規則的で体系的な変化という論理によって特徴づけられるものなのである。

2. 衣服とコミュニケーションの関係性

アン・ホランダーやアリソン・リュリーなどは、「衣服は言語である」と主張してきた。衣服には何かを明瞭に表現する力があり、外見が何かを語りかけるということである。リ

ユリーにとって、洋服やアクセサリは独自の文法、構文、語彙を持った立派な視覚言語なのである。衣服の持つイメージによって明確な意味や美意識が作り出されるというのだ。もし内と外が合致しているとすると、衣服は自分のことを周囲の人々にうまく知らしめると共に、その逆に内に隠した秘密を漏らすことにもなる。洋服は着る人の内面の地図となるのだ。(ホルンダー1980, リュリー1992)

ファッションによるコミュニケーションは、例えば、Tシャツに文字を書き込むような言語コミュニケーションに見られる。Tシャツというメディアは非常に便利で、言語による情報を、場所を選ばず伝えることができる。2002年には、コムデギャルソン・ジュンヤワタナベ(渡辺淳弥)が、春夏メンズコレクションで文章をプリントするなど、言語によってメッセージを伝えようとする手法はモードの世界でも健在である。むしろTシャツが着られる場面が多い現在では、我々が衣服の上の文字を見ない日の方が珍しくらいだろう。しかし、ファッションにおけるコミュニケーションということを考えると、衣服自体を言語コミュニケーションのメディアにしてしまう手法は例外的といえる。Tシャツに関しても、単純に言語による情報が純粹に交換されていると考えることは、間違っているだろう。例えば、ブランドや企業のロゴというのは、それ自体宣伝として作られているはずなのに、Tシャツにプリントされるとプレミアム商品として取り引きされるという、おかしな現象も引き起こす。それは、そのロゴが模様として認知されているか、もしくは企業の名前以外の意味を持つようになるからだ。これを考えるだけでも、Tシャツにプリントされた文字が、ただ書かれたままのメッセージを伝えているのではないことが分かってくる。そしてそれらは、文字が書かれているからといって、特別な衣服として着られているのではなく、文字が書かれていない衣服と同等に扱われているということも、考えなければならぬだろう。衣服は言語を伝えるメディアとしては、他では持ち得ない特徴はあるものの、本や新聞のような言語コミュニケーションのメディアとして存在しているわけではない。つまり、ファッションにおけるコミュニケーションは、人間が言葉以外で行うコミュニケーションの1つとして考えなければならない。

それでは、文字の書かれていない衣服はコミュニケーションを引き起こしていないのだろうか。文字が書かれていようがまいが、衣服がコミュニケーションであるということ、我々は感覚として知っている。例えば、初対面の人がどんな人なのかを理解するのに、衣服は非常に大きな手がかりになる。我々自身、時と場合によって着るものを選択し、喜怒哀楽などの感情を始めとした何らかの意志をも表明している。また、新しい流行がファ

ファッションの世界で起こるのは、コミュニケーションが確実に起きているという証拠でもある。ファッションの世界には情報のネットワークが存在すると考えるべきであろう。流行というのは、別の言葉でいうならば、瞬間的な価値観の共有であり、価値観の共有が起こるからには、そこにコミュニケーションがあるということが言えるのである。(成実2003:233, 234)

ファッションにおけるコミュニケーションには、多層な意味とその解釈が見られるのだが、むしろ、同じものにいくつもの意味を変えては、常に「新しいもの」として同じものが歴史上に何度も現れることが出来るのだ。我々の身近でも、ルイ・ヴィトンの鞆などは、高級ブランドとして認知されながら、かたや若い女性の象徴とも化している。さらに、製作する人と、それを見る人と、それを着る人と、着ているのを見る人では、それぞれが置かれている国籍や社会的位置あるいは時代によって、衣服に読み込む意味が全く違う。語られる場面や時期によって全く違う言葉が付着し、別の場面ではそれが簡単に剥がれ落ち、違う言葉が付着する。ファッションが、多種多様なコミュニケーションのからみ合った状況の中で展開しているということがよくわかる。言葉で語られることによって初めてファッションは社会と深いつながりを持つことが出来るのだし、思想や芸術や日常生活に対してボーダレスな提案や、警鐘を鳴らすことができるのだ。(成実2003:246~248)

現在我々が目にしているファッションという現象は、近代に特有のコミュニケーションの形態である。大量生産品によって日常生活が営まれることや、マスメディアが存在することが絶対条件であるし、階級が視覚的に見えにくくともかまわない社会でなければ現れることはない。

では、コミュニケーションとは何なのか。コミュニケーションに対する定義付けは、非常に難しい命題であり、はっきりとした解答を提示することは難しい。コミュニケーションという言葉はあまりに日常語化してしまっており、周りを見回してみても、様々なコミュニケーションの形態やコミュニケーション・ツールと呼ばれるものが氾濫している。電話やインターネットをはじめとするコミュニケーション産業を標榜する商売が全盛で、あらゆるものがコミュニケーションであると主張している。ここまで広範な意味で使われてしまっている言葉に対して、本当の意味はこうだと限定してしまうのは無意味だろう。ただ、そういった様々な使われ方を漠然と眺めていると、情報の伝達と収集に関係するということがわかってくる。

そこで、コミュニケーションの形態を、言語コミュニケーションと非言語コミュニケー

ションに分けて考えてみる。ミハイル・バフチン(1989:25)という言語学者は、言語以外のメッセージの伝達手段がすべて、言葉に囲まれ、そこに浸っており、そこから完全に隔離され、切り離される様なことはない、と述べている。確かに、ほとんどのコミュニケーションがその両面を備えており、何と何が非言語で何が言語といった明確な境界線は引けないとしても、言語によるコミュニケーションと、言語ではないものによるコミュニケーションとに分けて考えることはそれなりに有効な手段である。また、言語以外のコミュニケーションについてはずいぶん研究もされている。文化人類学者のエドワード・ホール(1966:60,61)は、そもそも文化とはコミュニケーションに他ならないとして、人間の諸活動を「相互作用、連携、生計、両性性、領域性、時間性、学習、遊び、防衛、開発」に分類し、そのうち最初の物のみが言語を含み、他の物は全て非言語的伝達過程であることを述べている。他にも、精神医学者のユルゲン・ロイシュ(1995,4)は、コミュニケーションは、言語レベルで明白に意図的に行われるメッセージの伝達だけを意味しているのではない、と主張している。

このように、人間と人間の関係性を言語以外のものを重視しながら研究しようという前例は、様々な分野に見られる。彼らのように意図的に非言語コミュニケーションを抽出して、自分たちの所属する社会の文化を再検討したり、他の社会と比較することは、人間の身体が持つ重要性を見事に描写してきたし、言語以外の文化が持つ価値をクローズアップさせたり、現代社会が持つ視覚への偏重という問題点も明らかにしてきた。我々自身について考えてみても、言葉以外で多くを伝え、情報を得ている。そういったものの中に、ファッションもあるのだ。バフチン(1989:34)が、記号の形態は、まず第1に、人々の社会的組織や、人々が相互に作用しあう際の身近な条件によって規定されている、と述べているとおり、記号論的な読みをしても、衣服の意味は着ている人、あるいは見る人が所属する社会集団によって決定され、日々刻々と変化してしまうものである。

第2章 既製服と洋装下着の登場

1. 既製服の登場と発展

今では洋服が日本人の服装として定着しているが、そうなったのは第二次大戦後のことである。戦前も都市の男性や学生、生徒、それと教師やタイピストなどのいわゆる職業婦人はすでに洋装をしていた。夏には、清涼着としてアップパという安価な木綿地を使った簡単なデザインのワンピースを着ることもあった。しかし、大半の日本人、特に女性は和装であることが好ましいとされていた。外では洋服の男性も家に帰れば着物にはき替えるなど基本的にはまだ和服が主であった。(小泉2004:5)

1945年に戦争が終わり、日本はアメリカの占領下におかれ、空腹をしのぐために着物を食べ物と交換するなど、貧しい生活を余儀なくされた。衣服が底をついてしまったため、戦争は終わったが着るものがないという状況になった。しかし、まだ生地が極端に不足していたので、戦前の着物にはもはや戻れなかった。そんな生活を送る人々にとって、映画など様々なメディアや進駐軍兵士たちから垣間見える欧米のライフスタイルは、憧れの夢の世界であり、目標でもあった。また、アメリカにとっても、欧米流の民主主義を根付かせることが日本の封建制や軍国主義を解体する早道であったため、アメリカの消費文化が積極的に持ち込まれた。また貧困に悩む日本人のためにアメリカから送られた「ララ物資(アジア救済物資)」の中に中古衣料が多く含まれていたことも、洋装化をよりいっそう促すきっかけになった。(成実2003:126)

また、戦死や未帰還によって男性が減少してしまったため、鉄道や工場、建設現場といった、それまでは男性が担っていた職場にも女性が進出するようになり、女性も必死になって働かなければならなかったので、活動的で合理的な洋服が必要とされた。女性たちは戦争中にモンペあるいはズボンと上着という活動的な衣服を体験しており、モンペはともかく、女性がズボンをはくというのはそれまでなかったことであるが、政府によって標準服のひとつとして着用を義務づけられた。モンペは、戦争の気配が増してきた1938年頃から防空演習に不可欠なもので、和服としては非常に機能的な衣服ではあったが、不格好であった。(鍛島1996:10,11)当時、もちろん洋服などはどこにも売っておらず、自分で作るしかなかった。しかし、洋裁ができる人自体がわずかだったため、少しでも洋裁ができ、ミシンを持っている人には注文が殺到し、女性の仕事となった。そうすると自分も洋裁で稼げるようになりたい、せめて自分や子どもたちの服を縫えるようになりたい

ということになって、全国各地に洋裁教室ができ、洋裁ブームが起こった。1950年代初めには、ブラウス、スカート、ワンピース、子供服やスリッパなどの既製品が現れ、それを利用する人も増えてきた。男性ものは、女性ものや子供ものに比べて、種類や数も揃って利用率が高かった。ワイシャツ、セーター、レインコートは既製品を選ぶ人が多く、背広、上着、ズボン、オーバーも既製品を買う人が何人かはいた。また、ミシンの生産も進み、1955年頃には、都市では普及率75%に達し、家庭洋裁も職業洋裁も一大隆盛期を迎え、洋服化は一気に進み、既製服が発展していった。これには各種の合成繊維の発達と大規模なアパレル産業の登場も関係している。その後、安価で誰でも着られる既製服が大量生産されるようになり、日本人の衣服はすっかり洋服に変わっていった。製造品に関する統計表である、通産省の工業統計表品目編で、既製服の生産について見てみると、1959年、最も多く出荷されていたのは、婦人少女用のブラウスであった。59年から69年までの伸び率を見ると、スカート、スラックスが最も大きく、次いでドレス、スーツであった。男女共、衣服の下体着であるズボン、スカート、スラックスは増加率が大きい。このようなことから、日本のこの10年間の既製服の大量生産は、ブラウスから始まり、ドレス、スーツ及び背広服の緩やかな発展、スカート、スラックス、男子用ズボンの急激な増大が見られたのである。戦前までは、既製服をつるしとかつる下がりと言った方が一般の通り名であったと言われ、つるしを着ていると白い目で見られていた。それが、このように既製服を利用するようになったのは、スピーディな時勢にマッチしたこと、値段が安いこと、品質が向上したことなどが要因であろう。(鍛島1996:14~16)

2. 洋装下着の登場

第二次世界大戦以前は、和装下着を着けていたが、和装下着は上半身に肌襦袢、下半身に腰巻というスタイルである。腰巻とは、風呂敷のような布を下半身に巻きつけ、腰ひもで縛る巻きスカートのような下着である。これは、すぐに裾が乱れて、前がはだけてしまうため、激しい活動には不向きであった。さらに、下が開けっ放しのため、冷えるという欠点もあり、冷え性に悩む女性には深刻な問題であったろう。このような欠点を若干改良し、和洋折衷の下着として、大正時代には都腰巻が登場し、流行した。都腰巻は、毛糸製で筒状に編まれたスカートのようなもので、前がはだけないので、腰巻より暖かく、特に中年以上の女性に愛好された。しかし、裾が不自由であるという点は、従来の和装下着とさほど変わらなかった。

一方、洋装下着は、シュミーズ、ペチコート、ブラジャー、キャミソール、シャツ、コルセット、ガーター、ズロースなどがあり、体にフィットするよう立体的に作られているために、活動的で保護・保温機能に優れているという長所があった。例えば、ズロースは、膝上ぐらいまでの長さがあり、裾にゴムが入れてあった。ズボンのように2本の足を別々に包むので、温かく、局部を保護する機能も十分に持っていた。前がはだけの心配も、足にまとわりつく不自由さもなく、活動的で機能的な下着といえた。しかし、洋装下着はこうした多くの長所を持っていたのにも関わらず、和服の下に着けるには不都合な点があった。ズロースは用を足す際に上げ下げをしなければならず、面倒であったし、着崩れしてしまう心配があった。洋装下着は、申し分のない機能を備えていたが、和服の下に着けるには不都合があり、戦前は洋装自体がそれほど普及しなかったため、洋装下着は普及しなかった。(小泉2004:115, 116)

しかし、敗戦後、アメリカの影響で洋装文化が流入し、洋服を着る人の数が急増するのに伴い、洋服を着るために実用的な洋装下着が本格的に普及し、需要が高まった。婦人雑誌などでは、洋服についての記事がたくさん掲載され、注目を集めた。

1952年に、初めて下着ショーが開催され、大きな反響を呼んだ。女性が下着に触れる機会が増加し、翌年から下着ブームが始まった。クリスチャン・ディオールはショーで、ブラジャーとペチコートを組み合わせたチューリップ・ラインを発表し、ブームの火付け役となった。チューリップ・ラインとは、美しく広がったペチコートは色物を使い、時にはリボンなどを付け、チューリップの花のようにふっくらとした上半身のシルエットに、チューリップの茎のようにすんなりとした下半身を着けるというものであった。一流デパートでは重要に伴い、下着売り場が拡張され、既製の下着では物足りずに、オーダーメイドをする人もいたという。ブラジャーやコルセットは本来、体のラインを整え、洋服に合う体を作るという理想に近づけるために必要とされていたが、当時は、肉が付きすぎて崩れてしまった、中年以上の女性の体を直すために必要だと、日本人女性は考えていた。しかし、ワコールなどの下着メーカーが次々と登場し、メーカーによって天然繊維や合成繊維などの新しい繊維が開発され、機能性が高い下着も登場し、服装に合った下着を着けるなど、細かいところにも気を配るようになり、女性の意識に変化が生じていった。また、広告が大きな力を持ち、流行色が次々と打ち出され、下着の形態は多様化し、流行も変化していった。(小泉2004:130~132)

1960年頃に、第一次下着革命が起きた。コンセプトは「見えないところにもお洒落

を」であった。アウターのお洒落やファッション感覚がインナーにまで及んだ。下着の色は白に限る、といった宗教的戒律により、それまで白無地だった下着に、色と柄がついていったのだが、これは下着の持っている清浄さという観念を冒すことであり、最初は受け入れられなかったが、60年代の10年間でほぼ受け入れられていった。新聞記者から下着デザイナーに転進した鴨居羊子は、マスコミではスキャンダルなパンティと評判になったスキャンティ(極端に丈の短いパンティで、希少なという意味)を発表し、ウィークリー・パンティ(7色パンティ)も登場させた。曜日によってはき替える楽しみが流行した。同時に、ドレスに下着の色を合わせる事が常識になってきた。ワコールのデータによると、1970年には、ベージュ色がピンクベージュも含めて下着の90%を占めるようになった。すなわち、下着のカラー化はその時点で完成したのである。はくのは真っ白い下着だけ、という人はわずかになっていった。

第二次革命がこれに続いた。70年までは、ショーツは基本的にウェストラインまでだったが、どんどん股上が浅くなっていき、お腹を覆うというのではなく、ほとんどミニマムに性器を覆うというところに局限されていった。この時期から、身体にぴったりしていることがファッションの特徴となった。下着は極小化され、ブラジャーはバストの不自然な強調から自然な表現へと変化し、ノーブラも登場した。また、流行の対象が中年から肉体を誇示できる若者へと移行した。これ以降は、ハイレグ路線が出て、下着の一部を外に出すファッションが若者に流行した。このようなことから、女性の自意識の高まりを感じることができる。(天野1992:49~56), (上野1992:59~69)

第3章 身体観とその変容

1. 衣服と身体の関係性

衣服は、装飾として始まり、身体的な機能要求というよりも、こうありたいという精神的な要求、あるいは変身願望から衣服を身に着けるようになった。ほとんどの文化では、洋服や身体装飾のスタイルは、体を別の形に変えるためにある。例えば、タトゥーをしたり、化粧をしたり、髪を染めたり、お洒落な服を着たりすることで、何らかの形で身体に装いを凝らし、ある美意識や社会的理想に合わせて身体を再構成することなのである。また、身体を無垢のままにしておくことなく、身体に何かを付け加え、装いを施し、引き立たせ、飾り付ける。身体は常に加工されており、何の手も加えることなしにそのまま放置してある部位はほとんどない。衣服が主体性の確立に関与し、体の文化的隠喩となることで、アイデンティティ形成の理論と身体管理とが直接結びついた。フーコー(1977)によると、衣服を通して管理制度が身体へ支配力を及ぼしていったという。

ブライアン・ターナー(1985)は、人間について一目瞭然かつ明白な事実は、人間が、身体を所有する存在であると同時に、身体そのものでもある、と述べている。つまり、身体は人間にとって自らの存在を条件づける環境であるとともに、人間そのものの存在と切り離すことが、不可能な実存でもあるのだ。また、人間の身体とは衣服を着た存在でもある。我々は、衣服によって覆われた身体によって構成された世界として社会を考えることができる。人類学者によれば、衣服とは人間が社会の中で生活を営む上での基本的な要素であり、人間のあらゆる文化においてこのことは共通の事実であるとされている。それぞれの文化や特定の文化の内部においても、適切な衣服とされるものの具体的な中身は異なっているが、ほとんどあらゆる社会的状況において、人々は何かを身に着けることを社会的に要請されている。公共的な場所では、その場にふさわしい衣服を身につけることを要請され、観察される対象として意識する。だから、公共の場でこれ見よがしに肉体を露出したり、うっかり肌を露出させてしまったりすることは不穏なことであり、混乱を引き起こし、秩序を乱すことになるのだ。しかし、家にいる時などは、そのようなことはない。特定の状況においては、その状況にふさわしい服装をしていないと、外見や衣服が気になって仕方がないものである。もし衣服が多彩であり、常にそれが場にふさわしいのであれば、着るという行為は無意識に行われるのであるが、就職の面接や大事な会議時の衣服のような場合は意識的に行われることもある。(エントウイスル2005:45,46)

また、衣服や装飾品は身体を社会化し、身体に意味やアイデンティティを付与する手段の1つである。例えば、衣服を縫うという個人的な行為は、実際は社会に対して向けられたものであり、人々が自らの身体を適切な社会的基準に合わせ、さらに魅力ある身体へと変えていくための準備作業なのである。状況にふさわしい衣服を身に着け、できるだけ見栄えを良くすることによって、自分の身体について気兼ねする必要がなくなるのだ。よって、衣服とは身体をめぐる個人的経験であり、身体の社会的な表現でもあるのだ。衣服が自己と他者との境界において作用しているということは、衣服が個人と社会との接触を意味し、私的なものと公共的なものが交差する領域を意味している。

さらに、むき出しの身体には強い性的な意味があるため、芸術作品が一般に公開される時には、社会の慣習によって規制を受ける。バーガー(1972)は、芸術やメディアの理解においては、裸体とヌードとの間に区別がなされており、後者の場合は、身体はたとえ衣服を身につけていなくとも、社会的に定められたしきたりや表象システムによって、まともわれているのと同じこととされる、と述べている。身体理解にとって衣服は決定的に重要であり、我々が裸体を見て表象する仕方さえも、衣服をめぐるしきたりによって決定されているほどである。また、芸術作品において示されているように、裸の状態は衣服をまともっている状態より頻繁に見出されるものではない。いつでも、むき出しの人間は、はるか過去の異なる世界において見出されるような衣服を着ていない人間より、むしろ衣服を着た人に参照例があるのである。(ホルンダー1993)また、ホルンダーは絵画や彫刻におけるヌードの描写が、それが制作された時代の支配的なファッションと対応していることを指摘している。つまり、ヌードとは決して異なる裸ではなく、衣服についての同時代の慣習によって装われたものなのである。また、きちんとした服装をすることは極めて重要であり、外見にこだわらない人でさえ、社会的に非難を受けないように、ある程度は気をつけているとされる。衣服とは、我々にとって、自身の重要な構成部分であるので、衣服に関して完全に無関心であることはできない。衣服の布地がまさに身体の延長、あるいは精神の延長ですらあるかのように感じられるのである、とクエンティン・ベル(1976: 16)は述べている。このように、外見と内面は密接な関係性があるのだ。

日常生活における衣服は、自己経験と自己表現における本質的な部分を構成し、アイデンティティの問題と強く結びついている。つまり、衣服・身体・自己、この3つは同時に全体として知覚されるものなのである。身体なしでは、衣服は完全さと変化を欠き、不完全な状態なのである。身体というものは社会的に構成されたものであると共に、常に文化

的に状況づけられたものであり、身体へと働きかけられた人々の行為の所産でもある。衣服とは着ること、着たことの結果なのである。

また、身体の外見についての意識はジェンダーによって異なる。パーガー(1972)は、男性よりも女性の方が自分の身体を観察される対象として考え、このことが、様々な機会に応じて装いをする際の、女性の衣服の選択を特徴づけていると述べている。

ツェーロン(1997)による女性たちと彼女たちの外見との関係についての分析も、身体に関する彼女たちの意識には異なったレベルが存在し、それが女性の衣服の選択を決定していることを明らかにしている。女性たちは、自分の外見について複合的な意識を持っており、外見に注意を払うことも、払わないこともある。また、一時的な行為のために、取り立てて意識しないこともあれば、意識することもあるのだ。

身体意識と衣服の実践についてのこうした傾向は、個人レベルで強く経験されるものではあるが、それは個人的なものでは決してない。これらのことは、欧米だけではなく、日本においても同じことがいえる。

2. 身体観の変容

日本において、洋服が一般的に普及するようになり、洋装下着が登場したことで、女性の体に対する美意識や身体観は大きく変化した。隠す美意識から、見せる美意識へと大きな価値転換が起こった。女性の体はパブリックに見られるようになり、内面よりも外見の美しさが追求されるようになった。いくつかの例を出して考えてみる。

ミニ・スカートはイギリスの既製服デザイナーである、マリー・クワントによって発表され、ミニの女王といわれるロンドンのファッション・モデルのツイギーが着たことにより、流行した。1967年にツイギーは来日し、ショーではミリタリー調のミニ・スカートのドレスやコート、パンタロンを着た。これ以来、日本ではミニ旋風が押し寄せた。ミニ・スカートは、ほとんどパンティがチラチラ見えるので、下着が見えることを意識して、アウターとインナーをセットで考えなくてはいけなくなり、ミニ・スカートと共に流行したのが、パンティ・ストッキングであった。パンティ・ストッキングは、パンティと靴下が一体になり、基本的に見られることを意識したものであった。パンティ・ストッキングは、ガードルとストッキングの間の空気を失くし、足先から腰まで継ぎ目なしのシルエットを作り出した。また、ストッキングは短期間に大きく変化した。素材は、絹、木綿などの天然繊維からナイロンの合成繊維へと変わり、形態は、後ろにシーム(縫い目)のあるフル

ファッションから縫い目なしのシームレスへ、さらにシームレスのパンティ・ストッキングへと変化した。色もドレスに合わせた色ものや文様入り、刺繍されたものが登場した、天然繊維のストッキングは、保温・保護を目的としたものであったが、ナイロン・ストッキングは、薄地で素足が透けて見えるので脚をすっきりと美しく見せた。(天野1992: 26~34), (青木2000: 224~226)

こうした変化が、はき心地を通して、女性の皮膚感覚、身体感覚を変え、行動や意識にまで大きな影響を及ぼした。洋装下着の出現以前の日本では、衣服の基本的な機能は、「隠す」とされ、女性は羞恥心を持つべきとされていた。しかし、今まで隠してきた脚を女性たちが人前で堂々と出し、軽快に活動的に振舞うようになったのである。脚を見せることで、より美しい脚になりたいという願望をさらに強くし、スリムになりたいという願望も生まれたのである。また、脚は男性にとっては、知らず知らずのうちに視線が引き寄せられてしまう部分であったので、女性は男性の視線を意識するようになったのである。また、女性は思春期頃から、男性の視線によって身体像の自己形成をしていく。身体像の形成というのは、女性にとっては他者が、特に男性が与える身体像を内面化していくプロセスといえる。身体像は自力で自己調達できるものではない。何らかの形によって社会が与えるものであるが、女性の場合は、それは非常にはっきりしていて、男性の与える価値によって決まる。一方、男性の場合には、女性によって身体像が与えられるということは考えられない。セクシーに見られたいという女性の欲望は、しばしば自然のものとして、自分にふさわしいと思う相手の心を惹きたいという女性たちの欲望から生じた自然な傾向である、と社会学者や心理学者によって見なされた。

また、バストに対する考え方にも変化が生じた。着物の時代には、胸が大きいことは恥ずかしいこととされていた。着物は、直線的で静的な美しさを強調する衣服であるため、下着もボディラインをできるだけ目立たなくし、筒型の体型を保つために身に着けるものであった。胸が大きいと帯が締めにくいし、着物の美観を損ねてしまう。そのため、胸の大きい人はサラシを巻くなどして、胸をできるだけ小さく押し込める工夫をしていた。戦前の「主婦之友」でも、胸を目立たなくすることを勧めていた。そして、胸部の下着も「乳押へ」や「乳房バンド」などの名前で胸を押さえ込むことを目的としたものが主であった。

しかし、戦後になると、胸を押さえるという下着の概念は変化した。1946年2月、「主婦之友」誌上に、胸部の下着が戦後初めて登場し、表記は「ブラジャー(お乳押へ)」というように変化している。同年6月からは、ブラジャーの作り方も度々掲載された。この頃

は乳房を包むカップの機能はなく、形の上では「乳押へ」とさほど変わりがなかったが、下着は洋服を正しく着るための土台となるもの、と位置づけられ、その意義は大きく変化した。こうした変化を象徴するものとして、ブラジャーパッドも登場した。このパッドを入れたブラジャーは、胸の膨らみを強調する下着として、今までの「乳押へ」とは全く別の意味を持つものであった。さらに、1953年4月、下着の通信販売の欄には、「豊かに整えられた胸、ウエストから腰にかけての美しい線…これが女性魅力の焦点です」と書かれている。1955年頃には、様々な用途に応じた機能的なブラジャーも販売された。(小泉2004:123~126)

戦前は、胸の膨らみは、邪魔なものとしていたのに、戦後は一変して、立体的な線を自然に生かすことが美しさにつながるものであり、豊かな胸は女性にとって大きな魅力であるというような、体に対する概念が変化してきたのである。また、敏感に時代の流れを感じ取り、その変化にとまどいながらも、流行に乗り遅れないように、という意識もあったのだろう。洋服は、立体的で動的な体の美しさを表す衣服なので、洋装下着は体の欠点を補い、立体的な体の美しさを強調することが大きな役割であった。洋装下着は、洋服を着こなすため、洋服に合った体作りに、なくてはならないものであったのだろう。体のメリハリをつけ、土台を整えることによって、洋装は美しくなる。和装下着との大きな違いはここにあった。洋装の普及によって女性の美の概念に変化が生じたことは、洋装のための洋装下着が根づき始めたことを意味する。

さらに大きな変化として、洗濯機の導入により、毎日下着をはき替えるという習慣が定着した。当初は清潔の観念から始まったが、その他に下着を人に見せたい、見られるかも、と女性が意識するようになったことも関係しているだろう。下着のファッション化は、性行動のカジュアル化と関係しており、女性は性に対してオープンになったといえる。また、セックスというものが、女にとって運命的なものではなくなった。例えば、生まれて初めて肉体関係を持った男性は、自分にとってその後の性的な運命を刻印する存在であって忘れられないとか、1度肉体関係を持ったら責任を取ってもらうなどの考えは古いとされ、そのようなことを言う女性は見られなくなった。つまり、性行動に関しては、女性の男性化が進んでいると言える。

3. 立居振舞いの変化

洋服が普及したことは、日本人の立居振舞いにも変化を及ぼす結果となった。そもそも

立居振舞いの美感というのは、人の歴史と生活の背景を映し出すものである。姿勢や動作の特徴というのは、個人的な癖や習慣によるだけではなく、社会全体に共有される集合的な特色がある。例えば、歩き方というのは、それだけが単独で形づくられているわけではなく、衣服やはき物、建築の様式、その社会に伝統的な生産労働や食作法など、生活全体との有機的な連関の中で、その民族の歩き方がつくられる。(矢田部2004:7)

立居振舞いの変化の1つは歩き方の変化である。日本人は長い間、足の親指に鼻緒を引っ掛けて歩いてきたので、つま先重心の歩き方であった。また、上体を前傾させ、膝を軽く屈曲させる、腰の入った状態が特徴的で、地面に対して高い安定性を備えていた。また、日本人に多く見られる歩き方は、歩幅が狭く、上体を前傾気味に、かかとを引きずりながら、膝から下を小刻みに動かす特徴がある。この上体の前傾した前方軸の歩行は、和服を着た時には、ごく自然な様式美を醸し出す。日本のはき物には、西洋靴のようなヒールが存在しないし、草履や雪駄などは台座からかかとをはみ出して歩くことが粹であるとされていた。つまり、日本人は、つま先で地面を踏みしめ、かかとはやや浮かせ気味に歩く特色を伝統に持っていて、現代の日本人もこうした伝統的な歩行様式から基本的に逸脱していない。(矢田部2004:20~23)

しかし、ミニ・スカートとパンティ・ストッキングが流行すると、女性たちは膝を伸ばし、背筋を伸ばし、堂々とした姿勢で歩くようになった。これは女性が、脚を見せてさっそうと歩くことに喜びを感じ、快感を味わうようになったという、女性の意識の変化が関係しているといえる。今までの日本人の特徴的な歩き方は、ヒールの高い靴を履いた時には、膝が大きく曲がり、腰が後ろに突き出され、不格好であったのだ。また、15~20歳の女性の平均身長は1951年の時点ですでに、戦前の水準を突破していた。(恩地1967:134)まだ食糧難の時代であったのに、体位が回復したのは、戦前期に比べて、精神的な抑圧が著しく小さくなったからであろう。ミニ・スカートが登場し始めた1965年、20歳の女性の平均身長は、153.8センチだったが、流行が終わった10年後には156.1センチへと上昇した。(厚生省1965:95~96)歩き方の変化は身長の変化にも影響を及ぼしたのである。

さらに、姿勢の変化も見られた。日本人は農作業の時に、深く腰をかがめて、地面に身を寄せながら作業しており、稲作における前傾姿勢は、背中全体がアーチ状に湾曲しており、腰を中心とした動作である。日本人に特徴的な前方軸の基本姿勢は、歩行動作へと展開する場合、膝の柔らかい屈曲が運動構造上の必須条件となる。前方軸の姿勢における膝

の屈曲は、地面から身体に伝わる衝撃を吸収するサスペンションとしての役割も果たしているのだ。多くの日本人に特徴的な前方軸の基本姿勢は、水田稲作における田植えの作業姿勢と似ており、身体技法と深い関わりがある。また、日常的な立居振舞いや様々な芸道における作法とも共通の技法的特性を持っており、競技スポーツの中でも相撲や柔道、剣道といった種目では、つま先重心の基本姿勢が重要視されており、それらの競技トレーニングの場面では、姿勢の安定を得るために、足の親指に力を入れることや下腹部に力を入れることなどが、日常的に認識されている。(矢田部2004:26~28)また、このような姿勢は、着物を着る上では楽な姿勢であった。

しかし、日本人に多く見られる猫背の姿勢で、普及した洋服を着るとバランスが悪く、不格好であったので、見られることに抵抗がなくなり、他人にはどう見えているのかと、周りの目を気にするようになっていった人々は、姿勢を正そうと努力したのである。

また、姿勢の変化には流しも関係している。水まわりとしての流しは、我々の食生活には欠かすことのできないものであり、生活空間の中に重要な位置を占めてきた。坐り(しゃがみ)式から立ち式へと変化し、使う人にとって、使いやすく、動きやすいものになっていった。日本における流しの歴史をたどると、まず流しは、台所の外から内に移され、土間に固定された。使う人の姿勢の変化は、①土間にじかにすえられ、しゃがんで使用する坐り式流しから、②それを土間で立ち上がらせ、脚台付きの流し(上流し)にし、③さらにそれを床上に移して、膝をついて使う床上置型の坐り式流しにし、④最後にそれを立ち上がらせ床上立ち式流しにするという方向へすすむ。(天野1992:153, 154)流しのこうした変化により、女性の姿勢も良くなっていった。また、姿勢は作業能率と疲労度に関わっているため、女性の負担も小さくなった。

終章

このように、日本における既製服の登場から発展までの歴史や、洋装下着の登場をふまえて、ファッションや身体について様々な理論に基づいて述べ、それが日本人にもたらした影響についても考察してきた。戦前、多数の日本人は和服を着ていたが、戦後、アメリカへの憧れなどから、洋服が登場し、のちに発展していった。それに伴い洋装下着も発展したが、日本人の衣服が変化することによって、特に女性の美意識や身体観が変化していった。下着のファッション化は、性行動のカジュアル化と関係しており、女性は性に対してオープンになったともいえる。つまり、ファッションは、外見だけではなく、人間の内面にも働きかけ、我々の自己の形成にも深く関係してきたのである。これは、ファッションの商業化にも、明確に表れている。人々の需要に対応し、その時代の流行の身体化に関わる商品やサービスを提供するシステムといえるからである。また、ファッションは多義的であり、普遍的なものであるため、今後も絶えず変化し、様々な国籍や人種の人々に影響を与えていくだろう。また、ファッションは様々な分野で研究されてきたが、ファッションとコミュニケーションの関係性について考察することは、我々の置かれている環境や自分自身を見つめ直すことになるだろう。つまり、我々は常に何らかの問いを持って、毎日を生きているのである。

引用文献

- 青木英夫『下着の文化史』雄山閣出版 2000年
- 天野正子、桜井厚『「モノと女」の戦後史～身体性・家庭性・社会性を軸に』有信堂高文社
1992年
- アン・ホランダ／中野香織訳『性とスーツ』白水社 1997年
- 上野千鶴子『スカートの中の劇場』河出書房新社 1992年
- 恩地日出夫ほか『戦後史ノート 下』日本放送出版協会 1976年
- 鍛島康子『ファッション文化～既製服と現代消費社会を考える』家政教育社 1996年
- ゲオルク・ジンメル／円子修平、大久保健治訳『文化の哲学』白水社 1976年
- 小池三枝『服飾文化論～服飾の見かた・読みかた』光生館 1998年
- 小泉和子『洋裁の時代～日本人の衣服革命』OM出版 2004年
- ジョアン・エントウイスル／鈴木信雄訳『ファッションと身体』日本経済評論社 2005年
- ジョアン・フィンケルシュタイン／成美弘至訳『ファッションの文化社会学』せりか書房
1998年
- ジョン・バーガー／伊藤俊治訳『イメージ：視覚とメディア』Parco出版 1986年
- ソースティン・ヴェブレン／高哲男訳『有閑階級の理論』筑摩書房 1998年
- 戸矢理衣奈『下着の誕生』講談社 2000年
- 成美弘至『モードと身体～ファッション文化の歴史と現在』角川学芸出版 2003年
- フェルナン・ブローデル／村上光彦訳『日常性の構造』みすず書房 1985年
- ブライアン・S・ターナー／小口信吉ほか訳『身体と文化：身体社会学試論』文化書房博
文社 1999年
- レナート・ポッジョーリ／篠田綾子訳『アヴァンギャルドの理論』晶文社 1988年
- 矢田部英正『たたずまいの美学～日本人の身体技法』中央公論新社 2004年